

西宮市の鳴尾地区で盛んだった「鳴尾いちご」の再興に、武庫川女子大(同市)の学生が取り組んでいる。地元農家に教わりながら栽培を

武庫川女子大

続け、数年前は数株だった苗も、今では700株に。今月26日には、学生らが鳴尾いちごの歴史について講演する。(斎藤綾香)

「鳴尾いちご」復活へ



キャンパス屋上で育てた「鳴尾いちご」を手にする武庫川女子大の学生たち。西宮市鳴尾町1

鳴尾いちごは、同地区で栽培されるイチゴの総称。砂地を生かす、明治後期から昭和初期にかけて盛んにイチゴが栽培され、イチゴ狩りの観光客らでにぎわった。しかし、宅地化が進み、農家は減少。国道43号以南での栽培農家は、1軒のみとなった。

再興の取り組みは2008年、同大生活環境学科の学生らが開始。12年には教育学科の酒井達哉専任講師(52)のゼミ生が引き継ぎ、キャンパス内の中庭で品種「宝交早生」の苗を数株から育て始めた。昨年、同大学校教育館の屋上などに畑が整備され、今年は約700株を育苗する。

26日 講座 学生ら栽培の苗配布

学生たちは水やりや枯れ葉の除去などを交代で担当。同大のキヤラクター「ミドリ」にちなんで愛称を「ミドリいちご」とし、近くの小学校へ苗を配布したり、シャムに加工して大学OGらに振る舞ったりしてPRを図る。4年の原田奈津さん(22)は「イチゴが盛んに育てられ、多くの人を呼び込んだことを、地元の人にも知ってもらいたい」と話す。

26日には「兵庫の伝統野菜と響く鳴尾いちご」と題した講座が同大であり、原田さんも登壇予定。西宮・大市のナスや、尼崎のニイモなどについてもJA職員が話す予定で、講座後にはイチゴの苗の配布もある。

午後1時半〜4時。無料。先着100人。県南南興民センター。県民運動課へ電話(06・6481・4542)かファクス(06・6482・0579)で申し込む。